

序『カラム』の時代 XIII

マレー・イスラム世界における移動とジェンダー規範

光成 歩

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム』(*Qalam*)を主な資料とし、脱植民地化期のマレー・イスラム世界における出版を通じたムスリムの社会構想を考察するものである。

『カラム』の時代は、人々の移動と交流の経験がメディアを通じた活発な言論活動に結実した時代であった。20世紀前半のマレー・イスラム世界で始まった様々な社会改革の努力は、出版メディアを通して共有され、ムスリム青年男女の移動の原動力となった。日本軍政期から1950年代にかけての戦争と混乱もまた、多様な形で移動を促した。本論集は、空間的ないし社会的な移動を経験し、遍歴の過程で身につけた越境者としての眼差しを文筆活動の糧とした人々による作品群を読み解くことで、『カラム』の問いを同時代の言論空間のなかに位置づける。また、女性の移動にも焦点をあて、必ずしも男性と同等の移動機会を持たなかった女性にとっての移動の意味と『カラム』の時代の女性イシューとの接続を試みる。

1. 雑誌『カラム』について

『カラム』は、1950年7月から1969年10月にかけて発行されたジャウィ綴りのマレー語による月刊誌である。編集者のエドルス¹⁾は、カリマンタン出身のアラブ人ムスリムで、1948年にカラム出版社(Qalam Press)を立ち上げ、小説などの商業出版をへて『カラム』の出版を始めた²⁾。『カラム』は、当時の定期刊行物の多くが短期間で停刊となるなか、20年間にわたって途切れることなく発行された異例の雑誌である。『カラム』の主な読者層はシンガポールを含むマラヤ在住者だった一方、タイ南部からボルネオ島を含むマレー・イスラム世界の周縁部にも読者がいた

1) サイド・アブドゥッラー・アブドゥル・ハミド・アル=エドルス(Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus、以下エドルス)。1911年にカリマンタンのバンジャルマシんで、アラブ人ムスリムの両親のもとに生まれ、1930年にシンガポールにわたって出版・執筆活動を始めた。エドルスの伝記に[Talib 2002]がある。

2) この経緯に関しては、[山本 2021]も参照されたい。

ことがわかっている。

マレー語出版において、ローマ字綴りが主流となるなかでジャウィ綴りを採用し続けた点も、他の定期刊行物と一線を画す『カラム』の大きな特徴である。『カラム』の発行当時、学校教育などを通じてムスリムだけでなく非ムスリムにもローマ字綴りによるマレー語が普及しつつあり、ローマ字綴りで出版することは、読者層を拡大する機会となりえた。『カラム』は、イスラム教育を通じてのみ身につくジャウィ綴りを採用し続けることで、ムスリムが抱える問題をムスリムのみによって議論する場となることをあえて選んだ[山本 2002]。

『カラム』は、同時代の世界が急速に変化するなか、マレー・イスラム世界のムスリムを「私たち」と呼ぶことで団結を促し、時代の変化にどう対応していくべきかを論じた。『カラム』創刊号では、次のように述べている。

今日、私たちが暮らすマレー世界は、社会環境、思想環境、政治環境のいずれにおいても大きな変化に直面している。それらの変化が私たちにとって有意義であった生活を向上させるものとなるためにも、私たちは適切な指導者や指針を必要としている

[*Qalam* 1950.7/8; 山本 2016]。

『カラム』の発行が始まったのは、東西対立が激化していた1950年である。『カラム』創刊号は、非イスラム圏の朝鮮半島の分断や戦闘について、歴史的経緯や戦闘の様子を地図や写真を用いて詳しく報じている。また、ベトナム戦争も報道写真をふんだんに盛り込んで取りあげられた[坪井 2014]。1951年4月号のイラストには、東西陣営の大国に虎視眈々と狙われているムスリムの群像が描かれ、背景にモスクと思しき建物がぼんやりと建っている[*Qalam* 1951.4; 山本 2016]。東西対立による政治的緊張のもと、大国間の競争からムスリムが取り残される不安、そして、足元で見られたマレー人若者の間に見られた信仰離れなどは、『カラム』発行のもとになる危

機意識だったと言える〔山本 2002〕。

『カラム』の長期連載記事のタイトルを挙げてみると、「社説」、「千一問」、「祖国情勢」、「女性の園」、「苦いコーヒー」、「月々徒然なるままに」、「我々はどこへ向かおうとしているのか」、「マレー語」、「宗教とは導きなり」、「コーランの秘密」、「コーランはイスラム文化の中心」、「イスラム国家」、「ムスリム同胞団」、「イスラム文化」、「言葉の広場」、「女性の世界」、「哲学と文化」、「イスラムの呼び声」、「芽を摘む」などがある。宗教、政治、女性、哲学、言語、文化といった幅広いテーマ設定には、脱植民地化と国民国家建設という政治過程と、社会の諸領域の変化とをつなぎ合わせてとらえ、独立によって社会が到達すべき方向性を判じようとする『カラム』の問題意識が示されている。連載の誌面では、実社会において連載のテーマに関連する出来事が起これば連載テーマを繰り下げて時事問題への論評を行うこともめずらしくなく、実社会への関心に裏打ちされた執筆および編集方針を読み取ることができる。

2. 『カラム』誌面における女性と社会

『カラム』には、女性の写真が数多く掲載されている。教室に居らぶ女子児童や学位記をもつ女子学生、政治集会で行進する女性たちなど、視覚に訴える写真記事には、社会において女性が新しい形で存在感を発揮することを積極的に評価した『カラム』の立場が現れている。

1950年代から1960年代は、議会でも、男女の賃金格差の是正や家族法の改革が議論されるなど、女性 이슈が興隆した時期でもあった。日本軍政期から戦後にかけての混乱のなか、離婚や離別で生存基盤を失った女性の困窮が社会問題化する一方、女性の経済進出も急速に進んでおり、女性を社会にどのように位置づけるかが社会全体の課題となっていたのである。

『カラム』は、創刊号から女性をテーマとする連載³⁾や、ムスリム女性の権利や家族規範に関わる論説などを掲載し、女性の社会的地位をめぐる進行形の議論を幅広く取り上げた。とりわけ、離婚女性や孤児の困窮に強い関心を寄せ、女性が安定して家庭を築く

3) 創刊号からの連載「女性の園」では、エドルスが女性の筆名でイスラムの婚姻や家族制度における女性の権利を論じた〔光成 2019〕。

上でも教育が重要であるとの立場から、安易な離婚、初婚の娘への婚姻強制、早婚による教育の軽視などを批判した。

自らの立場を表明するだけでなく、『カラム』は、誌面を割いて異説を丁寧に紹介することを旨とした。女性解放を訴えた論説がジョホール州のムフティによる異端宣告を受けた際には、その文面を全文掲載し、これに再反論して応えた。家族法の改革をめぐって対立した近代主義知識人との論争も、全てのやりとりを誌面で公開した。さらに、家族法の改革では、英文で書かれた法案をマレー語に逐語訳（およびジャウィ翻字）して掲載し、読者に改革の是非を吟味するよう促したり、反対集会に参加したイスラム団体の発言録を掲載したりした。

新聞、ラジオ、公文書、そして書簡まで、多様な媒体からの引用や転載を含めて誌面を構成することで、『カラム』は、ムスリムの関心事についての情報を多角的に提示し、それにより読者に検討する機会を提供した。読者は、『カラム』を通して、多様な立場の論者が意見を戦わせるムスリムの言論空間に参加することができた。

こうした誌面の特性と、20年間という発行期間は、『カラム』を通じたマレー・イスラム世界の長期的な課題の補足と、これに対するムスリムの動向の把握を可能にしてきた⁴⁾。本論集は、本年で13年目となる『カラム』共同研究のこれまでの成果をふまえ、『カラム』の時代の言論空間についての分析をさらに深めようとするものである。

本論集では、1950年代から1960年代にかけての社会情勢のなかで、マレー・イスラム世界で出版や文筆業に携わった人々が自らの置かれた社会の変化と課題をどのように理解していたかを検討する。具体的には、読者からの質問にイスラム知識人が回答する一問一答のコラム「千一問」を取り上げ、回答者となったエドルスをはじめとする『カラム』編集部

4) 本論集のもととなった共同研究の成果として発行された2010年以降の論文集『カラムの時代』十二編を参照。マレー・イスラム世界の「近代」〔山本 2010〕、公共領域の再編〔坪井・山本 2011〕、イスラム的社会制度の設計〔坪井・山本 2012〕、言論空間の形成〔坪井・山本 2013〕などをサブテーマとして分析を行ってきた。マレー・ムスリムの日常生活に焦点をあてたものに〔坪井・山本 2014；坪井・山本 2015；坪井・山本 2016；坪井・山本 2019〕がある。インドネシアとマラヤの越境するネットワークに焦点をあてた分析に〔坪井・山本 2017；坪井・山本 2018〕がある。本論集のもととなった『カラム』プロジェクトの概要については、過去の『カラム』共同研究の論文集序論〔山本 2010a；坪井 2019〕などを参照されたい。

が、当時のイスラム世界の状況をどのように解釈していたかを分析する。また、『カラム』の時代に文筆活動を行なった人々の自伝的作品や回顧録を取り上げ、「千一問」の問いや『カラム』の時代が、それに先立つ時代との関係でどのように位置づけられるかを分析する。

これに加え、資料編として「千一問」の日本語試訳を掲載する。日本語試訳は、本共同研究の研究代表を務めてきた共同研究員の坪井祐司が中心となって進めているもので、コラム「千一問」を初めて特集した2014年以降、本共同研究が毎年発行している『カラム』論集に、発行年順に作成した日本語試訳を掲載している。本論集では、第155号(1963年6月号)～第197号(1966年12月号)の「千一問」試訳を掲載する。

3. コラム「千一問」とムスリム社会の諸課題

『カラム』には、読者の投稿によって構成された誌面が複数ある。ムスリム同胞団の団員名簿および各地のムスリム同胞団員の活動報告などがその例である[山本 2003; 山本 2011]。残るひとつが、読者からの質問を募り、知識人が回答するという形式のコラム「千一問」である。「千一問」は、『カラム』創刊号で質問の募集を始めてから停刊まで掲載が続いた。連載記事のなかでも、創刊から停刊まで掲載が続いたのは「千一問」のほかエドルスが筆名で書いた「苦いコーヒー」⁵⁾という論説欄だけであり、掲載期間の長さから、コラムが読者の支持を得ていたことが推察される。

「千一問」は、日常の宗教実践や社会生活のなかでムスリムが直面した疑問や課題についての生の声を採録した誌面であり、1950年代から1960年代の社会の状況や、それに対するムスリムの主体的な問題意識を明らかにする上で豊富な情報を含む。「千一問」の分析においては、掲載期間が長く情報量の大きい「千一問」の内容を俯瞰的に把握するための分類作業と、内容の分析とを並行して進めてきた。

分類作業では、質問の意味によって切り分けた質問群データを、米国議会図書館分類表およびファトワ集項目という二つの枠組みで分類し、分類結果と分類作業の課題を示した[光成 2020; 光成 2021]。内容の分析では、ハラルとハラムに関する問答[金子

2015]、女性名での投書[山本 2020]、ザカートに関する問答[足立 2020]、回答におけるコーラン引用[坪井 2021]、他民族や他宗教との関係[金子 2021]など、テーマ別の分析を行ってきた。

本論集では、「千一問」の内容分析を進めるとともに、同時代に青年期を迎えた男女の移動経験に着目した検討を行うことで、これまでに整理した「千一問」の論題を個人史の角度から分析した。本論集に採録する5本の論文の内容と位置づけについて、以下で簡単に説明する。

坪井は、「千一問」における「イスラム国家」に関する問答を抽出し、(1)非イスラム国家との外交関係、(2)国家と個人の宗教実践、(3)国家と社会経済、(4)マラヤの国内政治、(5)インドネシアのダフル・イスラム、(6)イスラム国家の理念、という6つのテーマに沿って質問と回答を分析している。ムスリムが住民の多数を占める地域にあっても、世俗主義的な勢力の主導によって実際の脱植民地化と国家建設が進んだり、イスラム国家を称していても不十分な点が見られたりするなかで、「千一問」回答者らは、理念的に目指されるイスラム国家のあり方を読者に伝えるとともに、かならずしもそれが実現されない社会において、イスラム教の理念に合致する要素を受け入れていくことで思い描く社会に近づけようとした。

山本は、『カラム』創刊者のエドルスが1953年に刊行した児童雑誌『こども』に着目し、子どもに向けてイスラム教の教えや同時代の世界がどのように語られたかを分析している。エドルスが書いた「5分間の物語」の誌面では、当初、マレー・イスラム世界の伝承作品や、実話を基にしたエピソードを紹介していたが、その後、ギリシア神話を下敷きにした物語の連載が始まった。この経過には、大人の物語から抜き出したエピソードや、キリスト教的な価値観を根底にもつ欧米の児童文学ではなく、マレー・イスラム世界の子どもたちの信仰や価値観を育むために、ふさわしい児童文学を作ろうと模索するエドルスの試行錯誤を読み取ることができる。

光成は、1923年生まれの政治家アイシャ・ガニの少女時代に焦点をあて、日本軍政期までのアイシャの移動にまつわる経験からマレー・ムスリム社会におけるジェンダー規範とその変化を検討している。一家の女性で初めて学校教育を受けたアイシャは、両親の反対で一度は断念した進学を叶え、インドネシアの女子宗教学校に進む。日本軍の侵攻でさらなる

5) チュムティ・アルファルーク (Cemeti Al-Farouk) の筆名で、社会の出来事に苦言を寄せた。

進学への望みは絶たれるが、日本軍政期の困窮は、アイシャを含む女性たちに就業の道を開いた。萌芽期の女子教育運動を受けた内生的な変化と、戦争と混乱による急激な変化とがアイシャの遍歴を可能にし、また、『カラム』の時代の女性イシュー興隆につながっていった。

西は、1920年に生まれたマレーシアの作家アブドゥッラー・フサインの1940年代半ばから1950年代半ばまでの遍歴に焦点をあてている。第二次世界大戦期に日本軍の工作員としてスマトラに渡ったアブドゥッラーは、終戦後も、アチェやメダンで貿易業の傍らで文筆活動を続けた。1951年にシンガポールに移ってからは、華人との交友が増え、中国語とマレー語の文芸作品の橋渡しをする作家らと仕事をしたり、「50年代」のマレー人作家らと知り合い、マレー人ジャーナリスト協会に参加したりした。また、カラム社の雑誌『フィルム』の編集長となり、エドルスとマレー人ジャーナリストらとの仲立ちにも尽力した。アチェ出身の父を持ち、スマトラでもマラヤでも自らを越境者と自覚してきたアブドゥッラーが、その経験を活かして編集・著述業で活躍できた場がマレー語メディアの隆盛を迎えたカラムの時代のシンガポールだった。

篠崎は、マラヤ生まれの華人作家ルー・ポーイエが、日本軍政期とインドネシア独立戦争期を過ごしたスマトラおよびジャワでの体験をもとに著した作品をとりあげている。ルーは、インドネシアでの滞在中に、戦争による秩序の混乱や華人への凄惨な暴力を目の当たりにしていた。また、ルーがシンガポールに移ってからインドネシア作品群を著した1948年から1959年ごろにかけての時期は、インドネシアだけでなく、マラヤやシンガポールの情勢も不透明な時期だった。そうしたなか、(1)女性が男性をあやつり物事を進展させる強さ、(2)苦しい境遇に置かれた華人が示す独立戦争への連帯、(3)戦時下の分断のなかで人道や正義を問い続けること、を描いた作品群は、新たな時代にむけ、力によらない秩序構築を模索するルーの期待を示すものでもあった。

4. 『カラム』の時代と移動の夢

本論集では、『カラム』の時代に移動を経験し、出版や文筆活動に参入した人々の足跡を辿ることで、『カラム』の問いと構想を同時代の社会史的な背景のもの

とに位置づけることを試みている。

『カラム』の時代のシンガポールは、インドネシアとマラヤから流入した文筆家やジャーナリストが集っていた。地域をまたぐ移動経験を持つこれらの人々は、遍歴の過程で培った視角から、インドネシアやマラヤ、そしてシンガポールに望む社会のあり方を、出版メディアをとおして表明した。ルー・ポーイエは、独立のために戦うインドネシアの人々への強い尊敬や共感を示す物語のなかに女性の強さや華人とインドネシアの人々の共闘といったテーマを織り込むことで、平和な秩序構築への展望を示そうとした(篠崎論文)。エドルスを中心とした「千一問」回答者は、ムスリムが多数を占める社会でもイスラム教に基づいた理想の国家運営がなされないという現実を認めつつ、現実の社会のありようのなかにイスラム教に合致する望ましい要素を見出そうとした(坪井論文)。

新聞や雑誌といった出版メディアだけでなく、映画やラジオが人気を博したメディアの競合と隆盛の時代にあつて、メディアそのものに理想のあり方を追求する動きもあった。英語新聞の焼き直しでなく、マラヤの人々の関心を反映した出版メディアが必要だと感じていたアブドゥッラー・フサインは、マラヤ向けマレー語紙(誌)の多くが、資金難と読者の関心を顧みない編集方針により停刊に追い込まれたことを皮肉まじりに記した。書き手であり編集者であり、また遍歴の最中も読み手であり続けたアブドゥッラーのメディア評は、孤立も辞さない信念をもったエドルスと『カラム』の特長を改めて浮き彫りにしている(西論文)。カラム社の出版物は、政治指導者や宗教指導者を臆せず批判するエドルスの記事により、話題にもなれば、ボイコットによる資金難に陥ることもあった。経営難の煽りを受けて創刊から1年未満で停刊となったものの、1953年に刊行された『こども』は、大人の物語の一部ではなく、欧米の児童文学の焼き直しでもない、マレー・ムスリムの子どものための児童文学を作り出すことが試みられた雑誌であった。信仰や価値観を長い目で育むことを構想し、そのためのメディアづくりを試みたエドルスの編集者としての姿勢が明らかになった(山本論文)。

行動範囲が制限された同時代のムスリム女性においては、移動や遍歴自体が容易でなかった。アイシャ・ガニが進学への断念を余儀なくされた経験に見るように、移動できなかった経験は、移動が叶った経験

とともにその後のキャリアに強いインパクトを残している。『カラム』の時代に入り、より多くの女性に就学や就業による移動の機会が開かれたことは、少女時代のアイシャの葛藤が、若いムスリム女性一般の経験として共有される可能性をもたらした(光成論文)。社会における女性の存在感を積極的に発信した『カラム』は、女性たちが自らの経験を共有し、議論することを促した女性に向けたメディアでもあった。

本研究の実施にあたっては科学研究費助成事業若手研究「多宗教社会とムスリム女性：脱植民地化期のマレー語月刊誌『カラム』の記事分析より」(研究代表者：光成歩、課題番号：20K13204) および京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」(CIRASセンター)の公募共同研究「東南アジアのムスリム社会の近代化とジェンダー規範の変容」(研究代表者：光成歩)の助成を受けた。

参考文献

(1) 雑誌

Qalam. Singapore/Selangor.

(2) 論文・文献

Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

足立真理 2020 「マレー・イスラム世界におけるザカート(喜捨)概念の歴史の変遷——1950, 60年代『カラム』誌におけるQ&Aコーナー「千一問」から」光成歩・山本博之編著『カラムの時代XI——マレー・イスラム世界の女性と近代』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 23-44。

金子奈央 2015 「読者の日常生活におけるハラル」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代VI——近代マレー・イスラム教徒の日常生活2』京都大学地域研究統合情報センター、pp. 32-36。

金子奈央 2021 「『千一問』にみるムスリムの異文化理解」光成歩・山本博之編著『カラムの時代XII——マレー・イスラム世界の社会変容と女性』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 31-43。

坪井祐司 2014 「カラムが切り取った世界——写真が語る東南アジアイスラム教徒の世界観」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代V——近代マレー・イスラム教徒の日常生活』京都大学地域研究統合

情報センター、pp. 9-18。

坪井祐司 2019 「序『カラム』の時代——マレー・イスラム世界における自然と社会」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代X——マレー・イスラム世界における自然と社会』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 3-7。

坪井祐司 2021 「『千一問』におけるコーランの引用」光成歩・山本博之編著『カラムの時代XII——マレー・イスラム世界の社会変容と女性』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 22-30。

坪井祐司・山本博之編著 2011 『カラムの時代II——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2012 『カラムの時代III——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2013 『カラムの時代IV——マレー・ムスリムによる言論空間の形成』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2014 『カラムの時代V——近代マレー・ムスリムの日常生活』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2015 『カラムの時代VI——近代マレー・ムスリムの日常生活2』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2016 『カラムの時代VII——コラム「千一問」にみるマレー・イスラム教徒の宗教実践』京都大学地域研究統合情報センター。

坪井祐司・山本博之編著 2017 『カラムの時代VIII——マレー・イスラム教徒の越境するネットワーク』京都大学東南アジア地域研究研究所。

坪井祐司・山本博之編著 2018 『カラムの時代IX——マレー・イスラム教徒の越境するネットワーク2』京都大学東南アジア地域研究研究所。

坪井祐司・山本博之編著 2019 『カラムの時代X——マレー・イスラム世界における自然と社会』京都大学東南アジア地域研究研究所。

光成歩 2019 「『カラム』が論じた女性の権利と自由——コラム『女の園』より」坪井祐司・山本博之編著『カラムの時代X——マレー・イスラム世界における自然と社会』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 15-20。

光成歩 2020 「近代的な知の分類と東南アジアのムスリム社会——「千一問」質問群にみるムスリムの社会生活と知的関心の広がり」光成歩・山本博之編著『カラムの時代XI——マレー・イスラム世界の女性と近代』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 16-22。

光成歩 2021 「マレー・イスラム世界の論題と女性イシューの位置——イスラム教に基づく知の分類方法による「千一問」質問群の特徴分析」光成歩・

山本博之編著『カラムの時代XII——マレー・イスラム世界の社会変容と女性』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 9-21。

山本博之 2002 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』第20号、pp. 259-343。

山本博之 2003 「東南アジアにおけるイスラム教徒同胞団の成立とその初期の活動について」『ODYSSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科)、第7号、pp. 59-73。

山本博之編 2010 『カラムの時代——マレー・イスラム世界の「近代」』京都大学地域研究統合情報センター。

山本博之 2010a 「序『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」、1950～1969年」、山本博之編著『カラムの時代——マレー・イスラム世界の「近代」』、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 4-9。

山本博之 2010b 「選挙と反乱——インドネシアの1955年総選挙の分析記事」、山本博之編著『カラムの時代——マレー・イスラム世界の「近代」』京都大学地域研究統合情報センター、pp. 26-32。

山本博之 2011 「連載記事『イスラム教徒同胞よ、今こそ団結せよ！』」坪井祐司・山本博之編著 2011 『カラムの時代II——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』京都大学地域研究統合情報センター、pp. 25-31。

山本博之 2016 『雑誌からみる社会——情報とフィールド科学3』京都大学学術出版会。

山本博之 2020 「投書欄に見る雑誌読者コミュニティへの参加の欲求——「千一問」の女性名の質問を中心に」光成歩・山本博之編著『カラムの時代XI——マレー・イスラム世界の女性と近代』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 8-15。

山本博之 2021 「戦後シンガポールの活気と混乱——アフマド・ルトフィ名義の小説群(1948～1950年)をもとに」光成歩・山本博之編著『カラムの時代XII——マレー・イスラム世界の社会変容と女性』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 44-50。